



新宿から出た高山行のバスの横に座ったのはまだ高校を出て間もないくらいの女の子で、携帯のカメラで自分の旅立ちをおどおどしながら撮っていた。向こうは怖そうな髭の横で困ったことだろうが、「どこまで行くの。」と聞くと「平湯温泉です。その先はよく知らないんです。」という返事だった。まだきちんと働いたことがなくて、求人誌に載っていた温泉を見つけて行くところだという。「8時から5時半までで日給で7500円なんです。作務衣を着て足袋を履くんです。いろいろあってちゃんと稼がなくちゃあと思って。」そうしてごそごそとザックをかき回して出てきた紙を見て、「えーと、新穂高温泉というところで、平湯まで行けばわかるって言われました。」とい

う。埼玉の子だったが、平湯も新穂高温泉もまったく知らないし、途中の松本もほとんど知らない。そう甘くはないだろうなと思いながらゆっくり話しながら行った。バスは山肌が桜と雑木林で煙るように柔らかな高尾山の辺りを通り、山を抜けると桃の花が白い南アルプスの足元を埋め尽くしていた。その子は興奮して乗り出して花を見ていた。バスは更に、緩やかな裾野の上に白く輝くハケ岳の茅野、松本からりんごの木を見ながら雪の残る険しい谷へ入った。この子はいい時に旅立っていけるな。きっとこの景色は忘れられないものになるのだろうなと思いながら「この山の向こう側だよ。温泉以外に何も無いところだ。」という「どんなところが待っているのかまったくわからないからちょっと興奮しています。」と言ううちに雪の平湯のバスターミナルに着いた。私もこの露天風呂で一風呂浴びに降りて、バスの案内所を教えて別れた。「セーターを持ってくれば良かった。」と言いながら元気にザックを担いで手を振っていったが、回りはまだ雪の中で、後から車で名前を聞いていた旅館の前を通ったが山が迫った谷あいの道際にわりと立派なつくりの旅館であったが、日は陰って暗く。今頃あそこでもんな人達の中にいるのだろうと思いながら先へ行き、真っ白な槍を見て帰ってきた。それからまだ桜もコブシもつぼみの高山へ出て、5200円のビジネスホテル泊まり。夜は地下にもぐって気のあった人と静かな飲み屋でゆっくり飲み、翌朝、北東に広がる城跡や寺院を巡ってから岐阜県に向かった。途中山々は緑がみずみずしく、白山も真っ白だった。二日間ずっと車窓から見続けた日本の自然は美しく。本当にこの国のものなりは豊かで、チベット人やネパール人なんかが見たらなんと不公平なんだろうと怒るだろうと思いながら走ってきました。そんな山懐に若い子が一人入って行きました。せっかく生まれて来たのだから、みんなザック一つでもっとどこへでも行けばいいのだ。あの若さなら何度でもやり直しがきくのに。もっともっと広い世界を知ることが出来る。苦労するだろうけれども、それほどでもないだろう。美しい自然の中で旅立って行った人をうらやましいと思いました。

5月の「まなざし」の編集は15日におこないます。今月は沢山の子達が卒業して少なくなります  
が手伝いのかたはよろしくお願ひいたします

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com